

地域の「やってみたい」を応援する情報誌

みんな



この街でアートを楽しむ

アートは特別なものというイメージを持つ方は多いのではないのでしょうか。
非日常的なものだからでしょうか。
アートを通して自分の思いを表現している四街道の皆さんを紹介します。

アートって なんだろう



酪農とアート

鹿放ヶ丘で父の経営する牧場を支えながら作品を作っている西岡美千代さん。伝統工芸師だった母方の祖父の影響で、小さい頃から芸術が身近にあり東京藝術大学へ進学、そこで鑄金ちゅうごんを学びました。鑄金とは金属を溶かし型に流し込んで成形する技術の一つ。金属のような扱いの難しい素材を操ることに西岡さんは面白みを感じています。制作を続けるため、広さのあるアトリエが必要になり、実家の牧場に戻ってきました。

「子どもの頃から生き物の生死が身近にありました。日本の文化は死を遠ざけてしまうことが多いけれども、死は自然なこと。自分も大きな生態系の一部だと思っています」。生き物と共に過ごす西岡さんにとってアートは、生きることと死ぬことを表現する手段だそうです。

そんな西岡さんの作品を市内で見ることができているのは、四街道市在住の作家によるグループ展「テンテンテン展」(毎年夏に開催)。「作品を通じて、自分の知っている土地、

人と改めてつながる喜びがありました。四街道にはすてきな作家がたくさんいる。それも知ってほしいです」と発表の場があることで制作活動に対するモチベーションは保たれるのだと話しました。

市民活動とともに

テンテンテン展のメンバーは、さまざまな形で市民活動に参加し、市民の日常生活を支えています。

グラフィックデザイナーの遠藤祐子さんは子どもサポートプロジェクトに参加。「よつかいどう こどもたちのいばしょさがし」の制作を担いました。デザインを通してそのプロジェクトにかかわる人たちの思いを分かりやすく伝えることを意識しています。

宮本英恵さんはこれまで培ったアートの知識と経験を生かし、障害者支援に携わる一人。絵画を中心に

アート全般を通して自己表現できるようなプログラムを定期的に受け持っています。「その人のその日の気分は絵を通して伝わってくるのです」。

アートは言葉で表現することが難しい人にとって、社会や他者とながらツールとなり、日常生活を豊かにしているのです。



(写真右) 福祉施設でアート支援を進める宮本さん (写真左上) 西岡さんの作品「うつろう」 (写真左下) 遠藤さんがデザインした「よつかいどう こどもたちのいばしょさがし」

身近に感じて 広がる世界

連絡先

ギャラリーハルジ

住所：四街道市大日 868-3

電話：050-1026-2160

<https://www.g-haruji.com/>



「綿毛のようにアートを街中に広めたい」と話す三根さん（左）と菅原さん

2018年、大日の元歯科医院を改装して開館した「ギャラリーハルジ」。待合室、診療室、レントゲン室など歯科医院ならではの区切られた間取りを生かし、絵画を中心に版画や造形などの作品が並びます。

もともと歯科衛生士として働いていた菅原満紀子さんがアートの造詣が深く、待合室に絵画を飾っていたことがきっかけとなり、歯科医院を閉院する時に、院長の三根豊さんと共にギャラリーを運営することになりました。

オープン当時は、歯科医院の患者であった水彩画家をはじめ、市内在住の画家の個展を中心に開催。現在は幅広く県内外の作家の作品を展示しています。

三根さんは「四街道には美術館はありませんが、これからたくさんギャラリーや展示場所ができて、市民がもっとアートの触れる機会が増えることを望んでいます」とほめます。

アートの楽しみ方について菅原さんに尋ねると「難しいことは考えず、素直な気持ちで自分が好きか嫌いか

で作品を見てほしいと思います。自身のコンディションによって見え方も変わるので、何度も足を運んで作品と向き合ってみるとよいのではないのでしょうか。一つの作品でも感想はいろいろ。なかでも子どもたちが感じ取るものには大人がハッとさせられるものがあるそうです。

市民はこのギャラリーを訪れることでアートの触れ、関心を高めることができます。作家は作品を披露することで腕が磨かれていきます。人

と作品をつなぐ場所を提供できるところがとてもうれしいと菅原さんは語ります。



ハルジの窓辺で街を見守り続ける
じょうろのオブジェ

今こそ、アートの力を

「みんなで」のテーマにアートを取り上げると決めた時、その楽しみ方をどのように伝えたらよいのか、悩みました。

今回の取材を通して、アートは作家からのメッセージでもあり、受け手はそのメッセージをどのように受け取ってもよいものだ、ということが分かりました。

多くの作品を見ることで私たちの感性は磨かれていきます。そうして培われた豊かな想像力をもって、人と接することが、街全体を明るくすることにつながるのではないのでしょうか。

アートには、それを体験したり見たり触れたりすることで心をほっとさせ、また明日も頑張ろうと思えるような力があります。

コロナ禍において自粛を強いられがちな毎日ですが、気持ちを緩める時間も必要です。そんな時に日常的にアートを感じることが出来る街になるといいですね。

ピックアップ①

みんなで災害支援を考えるつどい
～四街道市にみんなで
災害支援ネットワークを！～



ますます激甚化・多発化する自然災害。被災者への支援は、国や自治体によるものだけではなく、地域、企業、NPO等の団体や市民にも求められています。

8月8日、36人が参加して専門的な知識を有する弁護士から法制度から見た被災者支援の話を伺い、ネットワークづくりの必要性を学びました。

前半は、弁護士永田豊さんによる講演「被災者支援と災害時連携の重要性について」。災害時には市町村が発行する被災証明やさまざまな法的被災者救済措置が用意されていることが示されました。さらに「利用する制度に選択肢がある場合は一人で悩まず専門家に相談しましょう。相談を受ける側も自分に関係なければしかるべき場へつなぐことも必要、そ

のためには多くの団体が連携をとることが大切です」。

後半は参加者の所属する団体が自分たちの活動を振り返りながら被災者支援について「提供できる資源」「ネットワークができると良い理由」などを考え、ワークシートを作りました。その結果から、各団体が災害時に支援できることは身近にあり広範囲に及ぶこと、そして連携することで一層深まることが分かりました。それぞれが提供できる資源・知識について発信しあえる関係を築いていけば、これ以上に心強いことはありません。

センターでは、これからも皆さんと一緒に勉強会や情報発信を行いながら災害支援のネットワークの構築を図っていく予定です。

ピックアップ②

講演とワーク
「まちにとけこむアート活動」



たまあーと創作工房
<https://www.tamart.net/>

10月11日、こまちだたまおさん（「たまあーと創作工房」代表）を講師に迎え、「まちにとけこむアート活動」の講演とワークを行いました。市内外からアート活動をされている方、福祉事業所でアート活動を担っている方を中心に31人が参加しました。

以前より子どもとアートの関わりに携わっていたこまちださんは、自然環境が身近にあることでアートの幅が広がることを感じ、出身地の上総一ノ宮でアート教室を始めました。さらにイベントの出版や福祉施設などの活動を通して、自身の役割が見えてきたそうです。「アートにはたくさんの答えがあり、社会にちょっとだけ潤いをもたらすツールとしての役割があります」と語ります。

後半は、アートをまちづくりにつなげるためのワークショップを行いました。まずはグループに分かれ、このまちの資源としてなにがあるのか、例えば歴史やどんな人たちが住んでいるのか、どんな自然や教育、福祉があるのかを出し合いました。そして自分の想いや夢を木に見立て、これらの資源を栄養にどのように花をつけ思いを实らせるかを絵にして描き出してみました。

人と人をつなぐアートの役割。今回はアートを生かしたまちづくりの考え方の基礎を学び、アウトプットを行いました。これからどのようにまちづくりにつなげていくのか、ヒントはたくさん見つかったのではないのでしょうか。

お知らせ

オンラインツールの
使い方について相談を受け付けます

オンラインツールを使って、地域のコミュニケーションを深めませんか？
センターでは初心者を対象にスマホやタブレット、オンラインアプリ（Zoom）の使い方について相談受け付け・サポートを行います。気軽にご利用ください。
※令和3年3月末まで毎週火曜日実施、完全予約制、対面・電話・オンラインで対応。
予約・問い合わせは下記センターまで。

みんなで26号

表紙の写真：鹿放ヶ丘で酪農業に携わる傍らアート活動を続ける西岡美千代さん

編集・発行：四街道市みんなで地域づくりセンター（四街道市政策推進課分室）

所在地：四街道市大日396 四街道市文化センター1階

開館日時：火～金9：00～20：00 / 土9：00～17：00（休館は日・月・祝日・年末年始）

電話：043（304）7065 メール：info@minnade.org

発行日：令和2年12月1日 発行部数：2,000部